
環境保護戦隊 エコブレイカー

深川辰巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

環境保護戦隊 エコブレイカー

【Nコード】

N7299L

【作者名】

深川辰巳

【あらすじ】

環境省に新しく創設された部隊、環境保護戦隊エコブレイカー。各省庁から集められたくせ者達と怪人達の戦いが今始まる！

第一話（前書き）

五分大祭に投稿させていただいた公務員戦隊キャリアンジャーをもとに手を加えて連載化しました。

別の作品になっていますが基本的なスタンスは変えていません。

第一話

悪の組織フロンガースの環境破壊活動に対し人知れず日夜戦う部隊がある。

それが環境省地球環境局環境保全部、通称環境保護戦隊エコブレイカーである！

第一話 地球の環境は俺たちが守る！ 給料のために！

1

「という組織があるんだが、花咲君、明日からそのリーダーね」
「は？ 課長。何の話ですか？」

環境省と厚生労働省が入居する霞ヶ関合同庁舎5号館の最上階には袴っ娘好き御用達の馬車道がある。

ランチにここへと課長に誘われたのは良いが、彼の口から飛び出した言葉は花咲にとって寝耳に水だった。

「いや、僕が悪かった。一から話をしないといけなかったね。環境破壊活動を行っているフロンガースという組織については知っているかね？」

話について行けず、せっかくのハンバーガーランチも味が分からない。いや、それ以上に編み上げブーツの袴っ娘のかわいらしさが味わえない。

「ええ、何でも怪人とかを作り出してあちこちで環境破壊活動しているとか……。許せん！」

「うむ、君のその正義感を僕は買っている。だからこそエコブレイカーのリーダーに強く推薦したんだ」

「その、エコブレイカーというのが分からないのですが……」

「フロンガースの怪人達と戦い、彼等の破壊活動を防止する組織だ。所属こそ環境省ではあるが、各省庁から出向者を集めて、縦割り行

政の壁を打ち破ったプロジェクトだ」

「そんな組織に私が……リーダーで……？」

「テレビの戦隊物を真似て、5人で組織される。そう、リーダーの君はレッドだ！」

二人とも食事の手はすっかり止まっていたが、何も叫びながら指を差さなくても良い、と花咲は思ったがそれ以上に言わずにはいられないことが一つあった。

「どうしてですか？ 花咲みどり、という名前なのに！ 環境省なのに！ 女なのに！ レッドに選ばれるんですか？ ここまで条件が揃っていたら普通はグリーンでしょう？」

「花咲君。エコブレイカーは環境省の組織だよ。環境省の職員がリーダーにならなくてどうする！ 大丈夫だ、各省庁から選ばれた海千山千のくせも……ゴホン！ エリート達を束ねられるのは君しかない！」

「今、曲者って言った！ 本当は各省庁の厄介者ばかりを集めたお荷物組織なんですよ！」

「あ、お姉さん。お勘定ー」

「ちよつと、課長！ 聞いているんですか？」

花咲みどり（24歳）環境省職員：レッド（リーダー）

2

「ふ……この僕もついに霞ヶ関に務めることになったか……警察庁ではなく、環境省に出向というのが気になるが、構わない。僕の出世の足がかりにさせて貰おう」

スーツ姿の男が合同庁舎5号館を見上げる。そぼの日比谷公園から吹いてくる緑の風が肌に心地良い。

「環境省に出向？ もしかしてお前も環境保全部の一員かいの！？」
後ろからやたらと張りのある大きな声をかけられてゆっくりと振り向く。

「ああ、その通りだが…… お前も、という言葉から察するからに君もそうなのかね？」

そこには長身でかつ筋肉質の男が着慣れていない新品のスーツ姿で立っていた。

「いや、仲間がおつて助かったわいや！ この辺は疎いけんのう！」

「田舎者が……」

「あ？ 何か言つた？」

「いや何も。それよりも君も環境保全部なら一緒に行くでしょう目的地は一緒なのだからね。僕の名は丹羽正彦。神奈川県警からの出向だ、君は？」

「ワシのうゝ今野海丸つて言うんで。オヤジが海保好きじゃけん、イメージキャラクターの名前を付けるわ、ホンマに海上保安庁に就職させるわ…… 散々なんで。丹羽…… ピーポ君じゃったかいのう？」

丹羽は眉毛をぴくりと釣り上げて、メガネを抑えながら答えた。

「うみまる君……。君が自分の所属している組織のイメージキャラクターと同じ名前だからと、他人までそうさせるのはいかなものかね。それにピーポ君は警視庁。僕は神奈川県警。別物だ。良いか僕の名前は丹羽正彦だ。覚えておきたまえ」

「同じ警察やないか！ ほいじゃあ、マサピポ」

「くつつけるな！」

今野海丸（26歳）海上保安庁より出向：ブルー（潜水担当）

丹羽正彦（25歳）神奈川県警より出向：グリーン（法規担当）

…… あだ名はマサピポ（決定）

3

「うん、ここの食堂のカレーはうまい。やはり金曜日はカレーを食べるに限るね」

図体のでかい男がお腹をポンポンたたきながら部屋に入ってきた。

「あなたが、村上六十四^{むかし}さん？」

花咲が開口一番尋ねると、村上は満足げに頷いた。

「村上さん。昼食は結構ですが時間は守っていただかなければ困ります。いいですか？ 私たちはこれから……」 お小言モードの花咲を横目に今野と丹羽がひそひそ話を始める。

「自衛隊は金曜日にカレーってホンマなんじゃのう」

「というか彼はイエロー……まさか、カレー好きというお約束をやってくるこの方が僕は驚きだ」

その会話にもう一人加わってきた。

「あら、でもレッドが女性というのはお約束から外れているんじゃないかしら」

「それが納得いかないんだ。リーダーはレッドは……そう、僕がふさわしい」

「じよじゃけど恵実よしざねさんのピンク姿は結構似合っとのう」

今野は恵実のヘルメットからマフラー、果てはミニスカ、ブーツと順番に視線を下してつぶやいた。

「やだ、海丸君ったら。めぐみって呼んで」

「あ、めぐみちゃん、ソックスからすね毛が飛び出てるよ」

花咲から逃れるように村上が割り込んできた。

「やだ！ 剃り残しなんて恥ずかしい！」

突然丹羽は頭を抱えてうなだれた。

「もつと違うところを恥ずかしく思っべきだろ……オカマめ……」

「正彦君、オカマじゃなくて、女・装・癖、別物だから一緒にしないでね」

そういつてめぐ……恵実^{よしざね}は丹羽に向かって投げキッスをした。

村上六十四（28歳）海上自衛隊より出向：イエロー（狙撃担当）

……カレー好き

小峠恵実（32歳）東京消防庁より出向：ピンク（ヘリパイロット）

ト）……女装癖、妻子持ち

「これで5人揃ったわね。今日は地球環境局長からの辞令交付があるため5号館に集まって頂きましたが、明日から活動の拠点は立川広域防災基地の一角に移りま……」

「ちよつとお待ちを！」

突然扉が開き、白衣姿の女性がつかつかと入ってくる。突然の出来事に隊員たちにざわめきが広がりつつあるのを彼女は手で制して静けさを取り戻した。

「環境保護のために戦うなら、科学技術は不可欠！ 文科省より出向してきたホワイトこと白石理智子^{さとしこ}を忘れて頂いては困ります！」

白石はピースサインを横にして額に当てるようなポーズを決めたが、部屋に沈黙が充満した。

「えーっと、というわけで、私達をサポートしてくれる白石さんです。ホワイトではありません」

「いいえ、ホワイトと言ったらホワイトです！ 私、懂れていました！ 戦隊の隊員になれることを！ 今日はとてもステキな日です！」

白石理智子：27歳：文部科学省より出向：自称ホワイト（装備・試験担当）

ここに各省庁選りすぐりの曲者たちが集った。戦えエコブレイカー！ 愛と友情と正義と地球環境とええっとなんだっけ？ 何かそんな感じのもののために！

次回予告！「早くもレッドとグリーンが？ 交わされる視線に秘められた熱い想い！」

第二話 早くもレッドとグリーンが？ 交わされる視線に秘められた熱い想い！

悪の組織フロンガースの環境破壊活動に対し人知れず日夜戦う部隊がある。

それが環境省地球環境局環境保全部、通称環境保護戦隊エコブレイカーである！

第二話 早くもレッドとグリーンが？ 交わされる視線に秘められた熱い想い！

立川広域防災基地、この一角に急造のプレハブ小屋があった。『環境省地球環境局環境保全部事務所』と手書きで書かれている木製の看板が立てかけられていた。

「なんか、『〇〇対策本部』みたいにいつでも撤去できるようにしているみたいでいやだな」

看板の前に立つ男がメガネを抑えながらつぶやいた。

「グリーンこと丹羽さん。ここは仮設の事務所ですからいつでも撤去できるようにしてあるのは当然ですよ」

後ろからかけられた声に男が振り向くと、そこには赤の戦闘服に身を包んだ小柄な花咲の姿があった。

「仮設であるならば、本格運用の事務所が別にできるわけだな」

「まあ、予算がつけば、ですけどね。最近は官庁営繕部も事業仕訳されているようですからいつになることやら」

苦笑してプレハブ小屋を見上げる花咲を丹羽はいつまでもじっと見ていた。

小屋の横、アスファルトで舗装されたスペースには太陽に照らされてきらめく水滴が飛び交っていた。

「百二十八！ 百二十九！……」

「海丸君、やるわね！ 私も負けてられないわよ！ 百三十二！ 百三十三！……」

今野は青の戦闘服の上半身をはだけさせて、盛り上がる肩の筋肉を酷使するように腕立て伏せを繰り返し、隣では桃色姿の小峠がその動きに合わせていた。

「恵実さん、気づいちよるか？ あの二人見つめあっちゃよるで！」

「あらあら、事務所の前でみどりちゃんと正彦君ってば……」

「ありやあできちよる。間違いなあで」

「女の勘でもそう思うわ」

「そうかなあ……下！ 僕はそんな風に……中！ 見えないんだけど……上！」

二人の横では、村上が89式自動小銃を壁に向かって空撃ちをしながら、的のどちらにずれたかを確認していた。

「六十四くんは、そういうところに無頓着だから気がつかないのよ」

「そうでえ、イエローはカレーにしか興味ないんじゃない？」

「そんなことないよ」。僕も男だから興味あるよ。でもあの二人はきつと違うよ。僕が気付いたところ理智子ちゃんが海丸君を意識しているよ」

空撃ちをやめて、立ち上がり銃を肩にかけて、腕立て伏せを続ける二人を見下ろした。

「はあ？ そんな素振り見たことなあでえ」

今野はあわてて立ち上がり、村上の前に詰め寄った。

「まあ、意識している、程度だからそんな気にしなくてもいいと思うよ。ちよつとトイレ」

去っていく村上の背中を今野は見送りながら小峠につばやいた。

「恵実さん、どう思うんじゃない？」

「私もそんな風には思わないけど。きつと適当なことって……サイレン！？」

「緊急出動じゃ！ 急ごうでー！」

今野ははだけさせていた服を整えながら、事務所へ駆けだした。

「みんな！ 怪人が出現！ 出動よ！ 場所は高尾山！ 小峠さんはヘリの準備を！ 他のみんなも装備を確認して！」

電話の音が複数鳴り響く。事務員達が対応で動き回る。その中でひととき花咲の声が響いた。

「了解、隊長！」

「分かったわ！ みどりちゃん！」

それぞれが、ヘルメットをかぶり準備を整えて、プレハブ小屋の前に集まり始めた。

「みんな、そろった？ 番号！」

「一」「二」「三」「四」「五」

「よし、五人いるわね！ 私を除いて……………ん？」

十の瞳が真つ白な姿の女性へと集まる。

「白石さん。あなたは事務所で待機ですよ」

「いいえ！ 私は付いていきます！。皆さんが着ている戦闘服も、乗っていくヘリも私が作成したもの、何かトラブルがあつてはいけませんから！」

「なに正当な理由がついた、みたいな顔をしているのですか。戦闘員ではないあなたを現場に連れていくことはできません！」

「やだ〜！ ついていく〜！ 離せ〜！」

事務所の男たちに引きずられて、白石はプレハブ小屋に消えていった。

「環境保護戦隊エコブレイカー、出動！」

花咲の掛け声で、一斉にヘリコプターへと乗り込んだ。

（村上、見てみい。ヘリの中でも二人見つめあつとるで）

（邪魔しないでよ。集中しているんだからさ）

ヘリの中ではローター音で普通に会話ができないため、お互いインカムで全員に話せるようにしてあるため、今野はゼスチャーで示

したが村上は適当にあしらい、89式自動小銃を両手で抱きかかえるようにして目を閉じていた。

（分かってくれるんは恵実さんだけじゃのお）

「着いたわよ。確かに高尾山でフロンガースの戦闘員がごみを不法投棄しているわ」

「なんですって、許せないわ！ それもリサイクル基本法で処分に経費がかかるテレビや冷蔵庫ばかり……。なんて卑怯なのかしら！」

「不法投棄ということは法規担当の僕の仕事だね。まずは証拠写真を抑えて確かに彼らが投棄したものだということを証明しなければ」
「のおお、これから怪人と戦うんじやろ。戦闘ポーズを決めようでえ」

「戦闘員とは違う姿の怪人らしき人がいるところに着陸するわよ」
「よい、てっ！」

いつの間にか開かれていたヘリのハッチから村上の89式自動小銃が火を噴いた。

「怪人を倒せば終わりなんでしょ。もう終わったから帰ろうよ」

「え、逮捕するんじゃないの？」

「戦闘ポーズは？」

「着陸しないでいいの？」

「「それ以前に怪人がこんなに無個性でいいの？」」

「いいの、イエローが怪人を倒したので、今日はもう終わりよ。今回はそういう話だから。フロンガースの存在はこれから小出しにするんだから」

「まあ、僕にかかればこんなものだよ。このまま平壤に連れて行ってくれたら、哨戒艦でもめているのも解決してあげるよ」

「その解決法は根本的に間違っている気がする。いや、今はそういう問題じゃない気がする」

「課長！　じゃなくて長官、聞いてください！　丹羽さんが私とリーダーを代わられて言っているんです！」

実は花咲をここに配属させた課長は自分も環境保全部の課長として赴任していた。本人もののりで全員に長官と呼ばせている。

「課長……ではなくて長官。花咲さんにリーダーを任せられません。ゴミの不法投棄と言えば犯罪ではありますが、射殺していいほど重い罪ではありません。法律的に手順というものがあるにもかかわらずそれを無視して射撃命令を下すような人物に指揮権は与えられません。そうであるならば、誰が指揮をするか、そう！　僕が！　ふさわしい！。名字も丹羽で赤色だし」

「聞きましたか？　課長！　丹羽さんはこんなことを言っているんです！　ぜひ交代しましょう！　ずっと見てきましたけど、私もグリーンがいいんです！」

「そう、僕も常に花咲さんがリーダーにふさわしいか見てきたけど、とても見ていられない！　交代させてください」

「ああ、やはり緑色は美しいわ！　赤は目がちかちかして落ち着かないし、リーダーは責任が重いし。お願いします！」

「だめ」

「何ですか！」

「そのあべこべが面白いんだもの」

戦え！　エコブレイカー！　作者の気まぐれと、受け狙いで意に沿わぬことがあったとしても！

次回予告！「あの娘がフロンガースに捕らわれた？　イロイロエロエロな責めに負けるなエコブレイカー！」

第三話 あんががフロンガスに捕らわれた？ イロイロエロエロな責めに負は

悪の組織フロンガースの環境破壊活動に対し人知れず日夜戦う部隊がある。

それが環境省地球環境局環境保全部、通称環境保護戦隊エコブレイカーである！

第三話 あんががフロンガスに捕らわれた？ イロイロエロエロな責めに負けるなエコブレイカー！

東京西多摩郡奥多摩町、この一角に里人から忘れ去られたようにひっそりとたたずむ鍾乳洞が一つあった。

となりの日原鍾乳洞のように観光地化されておらず、訪れる者は猫一匹いない。

それもそのはず。入口は大変狭く、大人の大人であれば這わなければ入ることはできない。

だが、仮に訪れた者が自然の生み出した鍾乳石を数本超えれば、不自然に地面が平たいことに気づくであろう。否、不自然というレベルではない、壁、天井、それらがすべて、明らかに人工的な『廊下』となっているのだ。

迷路のように複雑化しているその『廊下』を奥へ奥へと進む、そこはまるで中世の城にある王の謁見の間と違いない広間へと案内される。違いがあるとすれば、天井にはたくさんの白熱灯が灯り、壁面には大スクリーンをはじめとして、リーダー画面、各種無線機器、現代技術の代名詞ともいえる者たちに覆われていた。

「大王キシン様。高尾山で不法投棄の指揮にあたっていた怪人ナナ

シ様が何者かに銃撃されて落命されました」

機械類に覆われたこの部屋で唯一中世から持ってきたのでは、と疑いたくなるビロードの赤い布で覆い、背もたれやひじ掛けに金で意匠された玉座に腰掛ける男に、側近と思しき影が報告した。

「いちいち報告せずとも知っておる。あの大スクリーンに映し出されていたのをこの目でしか見たわ！」

大王キシンはパチンと指を鳴らすと、怪人ナナシが狙撃されたシーンが再生される。

「むむ、何度見ても忌々しく感じるわ。そばにいた戦闘員ラッカー達の報告によるとヘリの音が聞こえていたという。まさかと思うが、噂に聞いていたエコブレイカーが本格始動したのではあるまいな」

「私が集めた情報によるとそのようでございます」

次の瞬間ひと際高い音が広場に鳴り響き反響した。

「そうならばなぜ悠長なことをしている！ 四天王を呼ばんか！

それでもわが側近、三星羽さんせいうか！」

「はっはっは！ 癩癩を起こさずとも既に呼ばれてますぜ！ 四天王が一人、スモッグ只今参上！」

でかいハンマーを肩にかけたスキンヘッド上半身裸の日焼け筋肉男が、地響きをたてんばかりに大股歩きで広間に入ってきた。

「その通りじゃ。ナナシはわしが片手間に作った怪人。これがわしの実力と思われては困るのう」

頭部と左目以外は全身機械で白衣を着た老人が続けて入ってきた。

「ふん、Dr・クオーツよ。また機械の部分が増えたのではないか？ 強い怪人を作る前に己の体を優先しているようじゃ……ふぐ！」

老人の機械の腕は突然伸びてスモッグの口をふさいだ。その力は見た目に反してスモッグを圧倒していた。

「Dr・クオーツの名は捨てた。今はCO-2じゃと言っておろうが」

「ふがふが、わ、分かった。すまねえ」

「やれやれ、四天王同士で争っても何もならないわよ」

続けて白いチャイナドレスを纏い、その服よりも白い肌に赤い口紅が際立つ銀髪女性が現れた。

「おう、水銀！ 相変わらず美しいのう」

「鼻の下が伸びていますわよ。大王様」

「ん。これは威厳が無くなってしまうわい。あとは……」

大王キシンはスモッグ、CO-2、水銀の3人を見渡した。

「わわ！ 遅刻するー！」

「お前が早くしないからだろ？！」

「そんなこと言っただってー！」

扉の外から聞こえてくる幼い声に皆が眉をひそめた。

「遅くなりました！ すみません！ 四天王のひとりソックス今到着しました」

「ごめんなさいね！ 四天王のひとりソックスです！」

声以上に幼く小さい体の兄ソックスと妹ソックスが広場に現れた。

「うむ。全員そろったようだ。早速用件だが皆も知っての通り環境保護戦隊エコブレイカーがついに始動したようだ」

「そいつをぶっ潰せというんですな。わかります」

スモッグがハンマーをぶんぶん振り回して気合を見せた。

「やれやれ、筋肉馬鹿は黙っておれ。大王キシん様。ここはわしに任せてくれんかのう」

「えー僕たちも行きたいよー。なあ、ソックス！」

「うん！」

「遅刻組は黙ってなさい。大王キシん様。私ならば鮮やかなお手並みを見せることができますわ」

「うんうん。皆やる気でよろしい。だが、この件はすでに側近の三星羽にまかせておる。三星羽が失敗したら、四天王にまかせる。よいな！」

四天王が解散した後、三星羽は戦闘員たちを集めて早速作戦会議を始めた。

「ふっふっふ。昔よりヒロインは敵にとらわれて人質になるというのが王道。今回とて例外はない。戦闘員の諸君！ エコレットを捕えてくるのだ！」

「ガース！」

「ガース！」

立川広域防災基地の一角。エコブレイカーの事務所にサイレンが響いた。

「諸君！ 大変なことになった！」

サイレンにかき消されまいと大きな声で長官が叫ぶ。

「何があつたんですか長官？」

「大事な我々の仲間が一人フロンガースにとらえられた！」

「大変じゃないですか！ すぐさま助けに行こう！ リーダー！」

「ええ、みんな準備して！ エコブレイカー出撃よ！」

舞台は再びフロンガースの基地。ピンクのミニスカ姿で両手両足に枷で拘束された恵実の姿があつた。

「待て、お前ら。エコレットを捕えて来いと言ったのに、なぜエコピンクがここにいる」

三星羽が戦闘員たちを並べて問いただす。

「耳が悪いので聞き間違えました」

「目が悪いので見間違えました」

「頭が悪いのでいろいろと間違えました」

「口が悪いので有名なのは大王キシン様です」

「変態なので間違っています」

一人ひとりの答えにうなずきながら納得し次の指示を出した。

「まあ、人質には変わりないだろう。適当に拷問しておけ」

「ほんじゃ、まあ適当に電流とか流してみたり」

「うおお！ お父さんは負けないぞ！ こんな拷問で仲間の情報なんて吐かないぞ！」

「三星羽様！ ミニスカのひげ親父が悶えている姿はあまり見たくありません！」

「しかたあるまいな。じゃあ、適当に放っておけ」

「みんな！ ここよ！ エコピンクにしていた発信機の反応はこの洞窟の中よ！」

「よし、おいらの89式自動小銃が火を噴いちゃうぞ」

「てかワシら戦闘じゃ役立たずじゃのう」

「元々、僕は法規担当だし」

「大王キシン様！ 大変です！ エコブレイカーが襲ってきました！」

「なぜだ！ なぜこの基地が分かる！？ ええい四天王よ迎え討て！」

「すでに四天王はエコイエローの銃撃の前に倒れました」

「なんだと！ うわ！ もうここまで来た！」

エコピンクを助けに来たついででフロンガースを壊滅させたエコブレイカー。

だが、環境破壊をもくろむ組織はまだまだ沢山いる！

戦え、エコブレイカー！

地球の環境守るため！

でもやりすぎてはいけない！

敵がいなくなったら予算が削減されてしまうぞ！

マッチポンプでほどほどに！

次回第四話、ようやくブルーが主役！ 海の藻屑に消える戦士！

第四話 ようやくブルーが主役！ 海の藻屑に消える戦士！

悪の組織フロンガースの環境破壊活動に対し人知れず日夜戦う部隊がある。

それが環境省地球環境局環境保全部、通称環境保護戦隊エコブレイカーである！

第四話 ようやくブルーが主役！ 海の藻屑に消える戦士！

高尾山中の洞窟、フロンガースの基地の中は数多くの死体が累々と重なっていた。

死体を糧にしようと匂いにつられて野犬たちが集まる。

突然野犬の一匹が足をつかまれると、悲鳴に似た叫び声をあげ皆が四散した。

野犬が大暴れするのも意に介さぬように、つかんだ足を支えにして死体の山の下から機械の体が起きあがった。

「やれやれ……。身体を機械に改造しておいたおかげで死なずにすんだわい。どれ大王ほか四天王たちも改造して復活させるかのう……」

前回エコブレイカーによって壊滅されたはずのフロンガースはしぶとく復活の息吹を吐き出そうとしていた。基地の洞窟には夜な夜なCO-2の笑い声とともに機械音が響き渡っていた。

「という情報をつかんだ。どうやら、フロンガースはまだ滅んでいないらしい。」

ミーティングルームではエコブレイカー達が集まり長官の言葉に驚きを隠せなかった。

「それならば長官。もう一度フロンガースの基地に攻め込めばいい

のではないですか？」

丹羽のもつともな言葉に皆がうなづくが、長官は首を横に振った。「私もそれを考えたが、敵もバカではない。既に基地を移した後だった」

「なぜ、それがわかったんです？」

「こういう張り紙が貼ってあった」

エコブレイカー達にプリントが一枚一枚配られ、そこには文字と地図が書いてあった。

『フロンガス基地移転のお知らせ。一身上の都合により、基地を移しました。新しい基地の住所は群馬県××市……』

「ご丁寧にあクセスマップまであるじゃないですか。攻め込んだらいいんじゃないんですか？」

「駄目だわ。あのヘリの航続距離じゃ届かないところよ」

「おまけに関越道も、上越新幹線も通ってないから行くのは大変なところだね」

「だからって道路くらいはあるんでしょ？ 普通に車で行けば……」
再び長官がゆっくりと首を横に振った。

「お役所の予算は使い道を決められている。これは人件費、これは消耗品を買うための費用、といった具合にな……。エコブレイカーはヘリで活動するのを認められているため、航空燃料を買う予算はあるが、車で活動することを認められていない。すなわち、車を買う予算も、車を動かすガソリン代も、高速代もすべて！ 一円もないのだよ」

「ほいじゃあ、どうすればいいんかのう？」

「奴らが東京で、少なくともヘリの航続距離圏内で暴れるのを待つしかない」

「それじゃあ、それまで待機ですか」

「その通り。みんなそれまで訓練などに励むように」
長官がそう伝えた瞬間だった。

「サイレン？ 早速フロンガスかしら？」

「茨城県東海村の原発前面海域に時限爆弾を仕掛けたとの通報です。フロンガスから犯行声明が出ています」

「愉快犯みたいなことをする奴らだ！ よし、エコブルー海中搜索だ！」

「え、ワシ？ 今まで何もしてなかったのに急に出版？」

「頑張れ、海丸君。時間までに見つからなかったら爆発に巻き込まれて死ぬけどな」

「マサピボもさらつとひどいこと言うのう……」

突然会議室の扉が開き、白い影が入ってきた。

「駄目です！ 今野君にそんなことはさせられません！」

「し、白石さん！ エコブレイカーの会議中です。入ってこないでください」

「やっぱり理智子ちゃんは海丸君のことを……」

村上が89式自動小銃を大事そうに抱えながらニヤニヤしていた。

「普通のウェットスーツではなく、この私が開発したウェットスーツを着ていてください！ 伸縮率は従来の2.5倍！ 耐熱性能は-100℃+250℃！ 1tの衝撃にも耐えるので爆風に巻き込まれようと大丈夫！ たとえ中の人間が凍え死のうが焼け死のうが潰れようが、スーツは無傷！ さあ、今野君！ これを着て！」

「はあ……」

「あれ、理智子ちゃん、今野君に気があるんじゃないかな？ じつと見つめていることが多かったみたいけど」

「え？ ああ、私伊藤英明の大ファンで！ ついでで海猿も好きなんです！ だから、いつか私が開発したウェットスーツを着てもらおうと今野君の体のサイズを目測で測っていたんです！」

「六十四君の勘も当てにならなかった、ということなのね？」

恵実がしてやったり顔で村上を肘でつついた。

「何の話かはわかりませんが、海猿の3作目は9月18日ロードショーです！」

「そっちの方が何の話かわからないよ」

「とにかくこれ着て、爆弾を探せばいいんかのう？」

スーツを手に今野が途方に暮れていると、長官が電話を受けていた。

「はぁ、そうですか……警察が搜索して発見、処分済み……。エコブレイカーの出勤の必要はない……そういうわけですね」

頑張れ！ エコブレイカー！

組織力は警察の方が上だ！

たった五人じゃ先に越されることの方が多いぞ！

負けるなエコブレイカー！

予算を削減される前にフロンガスとの戦いの実績を上げる！

次回、第五話 四天王再登場！ ついに全面对決始まる！？

第五話 四天王再登場

悪の組織フロンガースの環境破壊活動に対し人知れず日夜戦う部隊がある。

それが環境省地球環境局環境保全部、通称環境保護戦隊エコブレイカーである！

第五話 四天王再登場

「突然ですが、私をエコブレイカーに入れていただけます？」

その日、銀髪のチャイナドレス姿の女性が、立川広域防災基地を訪れた。

「いくらなんでも突然すぎ……ああ！ あなたは！」

応対しようとした花咲の叫び声が狭い事務所に響き渡る。

「フロンガースの基地にいた美人さんじゃなか。ようきたのう」
素早くやってきた今野が脇の応接スペースへと誘導する。

「何をしているんですか今野さん！ 彼女は敵ですよ。偵察に来たに違いないのに、なにあっさりと通しているんですか？」

「何って、お茶用意しとるんで」

突然扉が強く開かれると白ひげの男が現れた。

「なんだなんだ？ 何の騒ぎだ？」

長官こと局長の登場である。

「長官！ いいところに！ 敵が現れたというのに今野さんがあっさりと通してしまつて……」

「なにい？ それはいかな……」

つかつかと応接スペースまで来ると、女性をキツと見下ろした。

「きちんと見学申込書を書いていただかないと……あ、ワシが手続きをするから、今野君はそのままお茶を……」

「長官！」

「ほっほう。それで水銀さんは環境問題に立ち向かうエコブレイカーの姿を見て改心したと」

「はい。ですから、私をエコブレイカーに入れていただければと……」

茶色いソファに白い女性が姿勢正しく座っているだけで事務所の空気が緩んでいる。エコブレイカーの男性隊員だけでなく、事務方の男性職員まで一目見ようと囲むように覗き込んでいる。

「私は反対です！　こんな美人を送りこんで男性陣を骨抜きにしようとしていることから明らかです！　きっと情報を手に入れてフロンガスに流すに違いありません！」

一人反対を続ける花咲の肩に手を置く者がいた。

振り向けば白石が首を横に振っていた。

「駄目ですよ。花咲さん。いくらここで正当な理由で反対し続けようと、彼女の美しさに嫉妬しているとしか見れません」

「そ、そんな……。でも、目立ってないかもしれませんが、私たちだってエコブレイカーのヒロインとして美人なんです！　嫉妬だなんて！」

花咲が顔を赤くして声を荒げれば荒げるほど、白石は余計に冷静に目を細めて首を横に振る。

「何をいまさら……。たとえ今私の容姿が『茶髪のゆるふわカール、マスカラを使って眼力パッチリメイクにグロスを利かせたプルプル唇、白衣の下は実はへそ出しルックにローライズパンツ、ハイサイブーツのギャルファッション。週末は渋谷に出没』と言われても誰も信じてないでしょう？

きつと『ぼさぼさヘア』は三つ編みにまとめて、渦巻き牛乳瓶底メガネ、化粧なんてファンデと口紅つけておけばオッケー、白衣の下はプリントTシャツにGパン（もちろんどちらも島村が湯に黒）、歩きやすいようにスニーカー』と言われればみんな『やっぱり』と

思うでしょう」

「う……それはそうだけど……で、実際はどっちなの？」

「見ての通り後者に決まっているじゃない。研究室は色々な測定器とかあつて熱に弱いから年中冷房が入っているのよ。へそとか足とか出してたら冷えて仕方ないの。髪の毛だってゆるふわカールなんてしてたら邪魔だし」

「異議あり！」

そこへ、丹羽が手を挙げて割りこんでくる。

「何よ。レッドになりそこない」

「なりそこないって言うな！ その牛乳瓶底メガネをはずしたら実は美人というパターンと見た。はずすまで僕は信じない！」

「何、漫画みたいなことを言っているのよ。メガネはしょせんメガネ。はずしたら美人なんて幻想よ。まあ、そこまで言うなら現実を見せてあげるのもいいけど」

何のためらいもなく白石はメガネをはずした。

「……………」

「ほらね、美人ってわけでもなく、いつそネタにできるくらいのブスでもなく、コメントもしようがなかったでしょ？」

「ま、白石さんのことはその辺りにしておいて、わ、私は……」

そこまで言いかけて水銀が割り込んできた。

「髪はショートで、染める？ 何それ？ と言わんばかりに黒のまま。メイクは眉と口紅をきりつとさせるように強調させるけど、それは男に負けたくないから。スーツにヒールで今日も仕事がんばるぞ〜ルック、なのよね」

「はああああ！ ど、どこでそれを！」

「さつき通勤しているあなたを見かけたから」

「花咲君。そんな恰好じゃ、男は言いよってこなくなるぞ？」

長官がまるで行きおくれの娘を心配するかのような表情でつぶやいた。

「心配していただかなくて結構です！ と、とにかく私は嫉妬から

じやなく総合的に判断して水銀さんがエコブレイカーに入るのは反対です」

「じゃあ、多数決を採ろうじゃないか。エコシルバーの入隊に賛成人」

長官の一声で手を上げなかったのは花咲と白石だけだった。

「長官！ 条件があります！ エコシルバーを認めるならば私をエコホワイトにしてください」

「だめ、君は支援要因だから」
「くっ」

「ふはは……見たか、エコレッドとエコホワイトの苦痛にゆがんだ顔を！ これを見ることができただけでも満足じゃ！」

フロンガースの新アジトでエコブレイカー事務所の様子が映し出されていた。

「大王キシン様も変態ですな。女性が苦しんでいる顔が見たいなどと」

そばに控えていた三星羽がフードを揺らしてつぶやく。

「うるさい！ しかし、そなたの考えた連環の計は成功しそうじゃない」

「大王キシン様、違いますぞ。これは埋復の毒でございます。水銀が降伏したと見せかけ、エコブレイカーを内部から破壊する計ですぞ。この程度を間違えているようでは11月7日に行われる横山光輝『三国志』検定は合格できませんぞ」

「おお、そうじゃったわ。昨日も勉強したばかりだというのに……。よし、ここで練習問題を出し合おうじゃないか」

「御意。それでは私から。『呉の二代目孫策がやろうとしてできなかったことは何か？』」

「ふはは！ そんな簡単なことでもいいのか？ 答えは『太史慈をあとと言わせること（文庫版6巻10P）』じゃ！」

「その通りです。太史慈はええっ（同17P）、おおっ（同55・

56P)、うつ(同64P)、わあつ(同68P)と叫びましたが、あつとは叫んでおりませんからな」

「ふふふ、次はワシからじゃな。『官渡の戦いがほとんど描かれなかったのはなぜか?』」

「大王キシン様らしくもない。そのような簡単な問題を出されるとは……。答えは『掲載誌変更で削られたから』ですな」

「さすがよのう。これで三国志検定1級は合格じゃ! わっはっはっ!」

再び立川広域防災基地。

「ね〜ね〜。さつきから何の騒ぎ〜?」

何も知らない村上がのほほんとした顔で事務所に入ってきた。

「ああ! イエロー様!」

突然水銀が黄色い声をあげて村上のそばに駆け付けた。

「お慕い申し上げます!」

その勢いのまま急に抱きついてきて村上は目を丸くして、水銀の肩越しに事務所の様子を眺めた。

「えつと〜。何の罰ゲーム?」

「それを罰ゲームだと思うお前は何者なんだ?」

「いや、こんなおいしい目にあわせて、有頂天になる姿をみんなで見ようって腹なんですよ?」

「いいえ、罰ゲームではございませんわ。私、昔から強くて……他の男どもの弱さにあきれていましたの。

しかし、そこに現れたのが貴方様! 私を殺せるほどお強いなんて……これはもう結婚するしかありませんわ!」

「わっはっはっ……む? エコブレイカーの事務所の様子が少しおかしくはないか?」

スピーカーから流れる水銀の言葉に違和感を覚え、高笑いをやめた。

「本当に水銀は我々に味方したままであろうな？ まさかイエローに惚れたから埋伏の毒のふりして、本当に裏切ったのではあるまいな？」

「えっと……実はこの計略は水銀からの提案でして……」

「あ、水銀がこつち向いて舌を出しおる！ まさか騙されたのはわしらなのか？」

「そうみたいですな、わっはっはっ」

「わっはっはっじゃねえ」

エコシルバーが味方に迎えたエコブレイカー！ 今までヒロインらしくないヒロインばかり（主にピンク）だったからこれで一気に華やかになるぞ！

でも悪の女性幹部がいないのもさみしいぞ！

次回、新しい悪の女性幹部登場？

第六話 新しい悪の女性幹部登場

悪の組織フロンガーの環境破壊活動に対し人知れず日夜戦う部隊がある。

それが環境省地球環境局環境保全部、通称環境保護戦隊エコブレイカーである！

第六話 新しい悪の女性幹部登場

「てこ入れた」

新アジトの奥深く、うす暗く輝き水銀を除く四天王がそろった広間で大王キシシがつぶやいた。

「え？ もうでございますか？」

三星羽が素っ頓狂な声で尋ねた。

「当たり前じゃ。悪の組織には女性幹部が必要じゃ。今までは水銀がその役目であつたが、裏切つた以上、代わりを立てねばなるまい」

「はいはい」 悪の女性幹部ならすでにここにいます」

背が低くツインテールとミニスカートを揺らしながら片手をあげてぴょんぴょんとび跳ねるソックスだが、大王キシシはそれを見殺してCO2へと向き直った。

「一つ水銀に負けぬほどのグラマーでセクシーでそれでいて天上天下唯我独尊俺様何様女王様、この世の男どもも皆私のもとに跪けい！ な女性怪人をひとつよろしく頼むぞ」

「はいはい！ 私もグラマーでセクシーでそれでいて天上天下唯我独尊俺様何様女王様、この世の男どもも皆私のもとに跪けい！

な女性怪人でーす」

「あ、追加で、ワシと二人きりの時だけはデレデレする要素もよろしくな」

「大王様、もはやツンデレは今日び流行りませぬぞ……」

「ワシがツンデレ好きじゃから良いんじや」

「大王様！ 二人きりになれば私デレデレしますよ！」

「さっそく取り掛かれい！」

「はは」

CO2は大王に恭しく頭を下げると広場から出て行った。

「で、ソックスよ、さあ、ワシのそばでデレデレすると……ぐげ！」

「あ、あれ？ 俺のハンマー……いつの間にソックスが？」

慌てふためくスモッグを傍目に、ソックスがため息をついていた。

「スモッグのおじさん……ソックスにも振り回せられるようなハンマーを持ち歩いているなんて……その筋肉は見かけ倒しですか？」

「いや、あの、すみません……じゃなくて、大王様が！ ソックスがハンマーで！」

「大王様なんて大つきらい！」 ソックスはハンマーを放り投げると泣きながら広場から出て行くと同時、入れ替わるようにしてCO2が背後に一人の女性を連れて入ってきた。

「できたぞ」

「……早！」「……」

「まあ、本当を言えば、大王様が言いだすことくらいお見通しで既に作っておいたものを、今起動してきただけじや」

「さすがCO2……ワシの考えていることを見透かすか。して、それが新しい女性幹部か」

「PM2.5と申します。以後よしなに……」

CO2の前に進み出て明りのもとに現れて跪くのは華奢な体格のメイド姿。動きに無駄はなく、周囲の空気を冷たく固めさせ、髪と同じく銀色の焦点が合っていない瞳で大王キシンを見上げていた。「ほほう、なかなかの出来栄えのようじゃが……。しかし、メイド姿では俺様何様女王様とは少し離れている気がするが……」

「この姿は皆様へのサービスなだけで、性格は大王様の所望通り」

大王は感心したようにうなづくと、おもむろに立ち止り号令をか

けた。

「それではP M 2・5よ！　まずは裏切り者の水銀を討て！　そのちエコブレイカーを殲滅せ……」

大王の目の前で冷たい風が通り抜けると、鼻頭に横一文字の赤い筋ができていた。

視線を落とすと、モップを振りぬいたP M 2・5の姿。

「誰に口をきいているのです。奴隷風情が！」

「は、早くて見えなかった……」

「返事はYESかNOで答えなさい！」「い、いえす……」

「よろしい。私に口を開くときは以後気をつけなさい」

「は、はい。それでは裏切り者の水銀を懲らしめてはくれないでしようか？」

「ご足労願いますがよろしく願います、ご主人さまと言いなさい！」

「は、はい。ご、ご足労願いますがよろしく願います。ご主人様」

「よろしいでしょう。ほかならぬ奴隷の頼みとあらば聞いてさしあげましょう。ですが、奴隷としての礼儀がなっていないですね」

言うや否や、P M 2・5はローファアを脱ぎ黒のニーソを履いた足を突き出した。

「口づけしなさい」

「え？」

「返事はYESか……」

「い、いえす……」　大王キシンは圧倒されながら、ゆっくりと腰をかがめて顔をP M 2・5の足元に近づいて行った。

「失礼。足が滑ってしまいました」

突然P M 2・5は大王キシンの顔に足の裏で踏みつけてぐりぐりと動かした。

「な、なな！」

「あはは！　素晴らしい踏み台ですね！　気に入りました！　もう

一つの頼みであるエコブレイカーとやらを討つのもついでにやってみましょう。そうしてほしいのでしょうか？　そうしてくだされば、至極幸せでございます、と言いなさい」

「そうしてくだされば……至極……幸せ……」

P M 2・5はそのまま足を大王キシンの頭の上までずらすと、地面に向けて踏みつけた。「あはは！　そうですか！　そんなに幸せですか！　まあそうでしょう。私に頭を踏まれて幸せでない奴隷はいませんからね！」

地面とキスした大王の頭をそのままガンガンと踏みしだき、満足すると高笑いしながら広場を出て行った。

「いいなあ、大王様……」

スモッグがぼそつとつぶやくと、三星羽が同意するようにうなずいた。

「え、あんなのがいいの？　大人ってわからないな……」

ノックスがやれやれと肩をすくめた。

「いかがでございますかな？　大王様。グラマーでセクシーでそれでいて天上天下唯我独尊俺様何様女王様、この世の男どもも皆私のもとに跪けい！　な女性怪人でございますよう？」

「で……」　地面に顔を埋めたまま、大王がつぶやく。

「で……？」

「デレデレはしてくれるんじゃない？！」

ガバツと起き上がりながら大王が叫ぶと、広場に大きく響き渡り、スモッグたちは耳をふさいだ。

「もちろんでございます。デレモードが始まると、先ほどの態度とは一転、二重人格と思うほどでございます」

「それならば許す！」

フロンガースに現れた新戦力！　他の四天王の実力も分かってないのに、てこ入れだけは着々と進行中！

P M 2・5のデレモードはどんなものなのか気になる人は次回も

見てね。

というか今回はエコブレイカーが一度も登場してないぞ！

次回！ エコブレイカー側にも新戦力？ 炎の七日間戦争に沈む
吉祥寺！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7299/>

環境保護戦隊 エコブレイカー

2010年12月25日22時55分発行